

6年生「いろいろな『性』について考えよう」の様子

少し前の話になり恐縮です。9月9日（火）に、6年生は市民科で、「いろいろな『性』について考えよう」という学習を行いました。講師に、NPO 法人共生社会をつくる性的マイノリティ支援全国ネットワークの副代表理事をしていらっしゃる渡邊歩さんにお越しいただき、お話をいただきました。渡邊さんは、カウンセラーや大学での講師など、幅広い分野でご活躍されていらっしゃる先生です。



初めに、先生の方から子どもたちに、「あなたが考える『男らしさ』『女らしさ』

ってどんなことですか？」という問いかけがあり、子どもたちの声を拾うことから始まりました。

○男子はうるさい、女子は怒ると怖い人がいる

○女子は自分を「私」と言うけど、男子は「ぼく」とか「俺」と言う

○男はガサツなイメージで、女は細かいイメージ

その他いろいろありましたが、「そのイメージって、みんな共通かな」と考えると、あくまでもイメージに過ぎないよねという話になりました。特に、例えば自分では「自分は明るい方だ」と思っているけど、周りの友達から「おとなしいね」と言われると、そのギャップに違和感を感じるという例えには、子どもたちも納得をしている様子でした。

そこからさらに本題の「性」にまつわる話になり、中には、性自認（心の性）として例えば「自分は（体は男性でも）男ではない」と日頃から感じている人が、周りから男として扱われることに苦しさ・ギャップなども同様であることが確認されました。

生まれたときの性別と性自認が一致する人もいれば、一致しない人もいます。異性を好きになる人もいれば、同性を好きになる人もいます。自分の当り前が、決してみんなの当り前ではないということ。講師の先生の「みんなと、同じでも違っていても大丈夫。みんなと同じフリをしてもいいし、自分の意思で『違う』と言ってもいいんだよ。」という言葉は、「性のことに関わらず、生きていく中で感じる様々なギャップに、もっと柔軟に『自分らしく』対応すればいいんだよ。」という、優しくも力強いメッセージとして子どもたちに伝わりました。

児童は感想の中で、「自分らしく生きている人すべてを受け入れること、いろいろな個性を受け入れることの重要性を感じた」と語っていましたが、まさに、多様性を受け入れることの大切さが重視されていく社会で生きていくにあたって、よい学びができたのではないかと心から感じました。

「今日だけをユートピアにはならない」話を聞いたその日だけでなく、そんな感性を大事にすることができる私たちでありたいと、心から思いました。